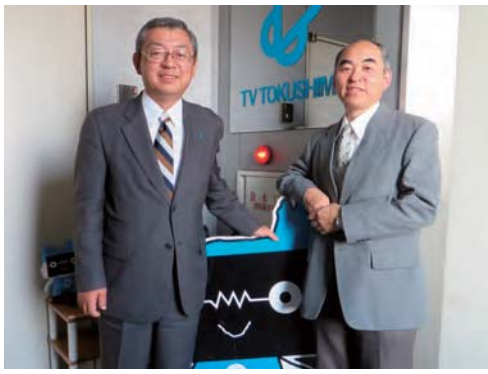
サービスエリアの完全光ケーブル化

山間部から始まった全国最先端



左から代表取締役社長の谷喜文氏と取締役技術部長の佐々木治之氏

地元から「テレビトクシマ」の愛称で呼ばれるケーブルテレビ徳島は、1990年の放送開始から25周年を迎えた。テレビトクシマのサービスエリアは約13万世帯で徳島県の約43%を占める。とくに地上民放1局（四国放送）エリアで、関西の準キー局を再放送してきたこともあって、現在の加入世帯数は12万を超え、加入率94%と高い。

（文・写真：吉井 勇・本誌編集長）

地デジ化で大きく変わった テレビトクシマの環境

テレビトクシマは1990年6月に放送を開始し、1998年には第一種電気通信事業の許可を四国で最初に取得、1999年6月からインターネット接続サービスを開始してきている。注目されるのは2004年8月に光ファイバーFTTHでケーブルテレビサービスを開始し、同年9月からGE-PONでインターネット接続を始めたことだ。この詳細は後述するが、四国だけでなく全国でもトップレベルのインフラづくりに取り組んできている。

代表取締役社長の谷喜文氏は最近の動向を「地デジ化によってテレビトクシマのビジネス環境が変わった」と話す。「準キー局の放送をアンテナ受信してきた世帯が、地デジ化で安定して受信できなくなったエリアが増え、テレビトクシマの加入者になってきています」という“変化”を話す。また、デジタル放送のテレビをリモコンで操作したときの微妙な遅れが年配者に不評で、デジアナ変換サービスの利用も多く、3月31日12時のサービス終了へ向けて丁寧に対応してきたという。そのこともあって、当日は大した混乱もなかったと、谷社長は“その日”を振り返った。

先頭者としての苦労を重ねて ケーブルテレビの光インフラを実現

テレビトクシマの名を全国区にしているのは、「2012年2月で同軸ケーブルによるサービスを終了」して全エリアの光化という最先端のインフラにある。光化の陣頭に立ってきたのが取締役技術部長の佐々木治之氏だ。「光ファイバー導入の検討は2003年あたりから始め、2004年にFTTHでサービスを始めました。2007年3月には新規加入者の同軸引き込みをやめて光引き込みを開始。2012年3月に同軸でのサービスを終了しました」と振り返る。

徳島市内のFTTHは12のサブセンターで構成されており、その置局の考えは2ルートの確保、加入系回線は10km以内を基準にしている。本局と12のサブセンターは光ループで繋がり、サブセンターから1Gbpsの信号を32分岐させて加入者宅を結んでいる。

佐々木氏は光化のきっかけを、「光ファイバーと同軸ケーブルで構成するHFCが広がったとき、市内の中心部で問題のない同軸でのエリアカバーが、山間部になると伝送距離の限度があり、コストも含めて考えると光ファイバーの方が安価であると考えたのです」と話す。

その実現は先頭ランナーとしての苦労が待ち受けていた。NTTでもFTTHを本格化していない時期だったので、コスト安く設備するために、光送信機、光AMP、家庭の受信用ONUを見つけることから始めた。「サイトの情報を徹底的に調べ上げ、使える機器をピックアップしてメーカーと交渉しました」と言う。

最初の光伝送実験は、2003年に行った受信用ONUの適正光入力レベルの決定であった。映像レベルの確認のため、本社から市内を回って、また本社に戻る約10kmの光ケーブルループを作ったという。「実際に10kmも離れていたら、送り出し映像と受信映像を比較できませんから」。

●

この光化は徳島市内の南部から取り組んだ。長距離伝送が必要で、人口密度が非常に低かったからで、その後に神山町、佐那河内村という山間部で広げている。佐々木技術部長は「ケーブルテレビの光伝送は田舎、山間部から始まったのです」と笑いながらも、「地方創生で話題を集める神山町のサテライトオフィスは、このテレビトクシマの光ファイバーがあるから実現できたのです」と、その先見性に胸を張る。

谷社長は「現在インターネットサービスはグループ会社のSTNetが行っていますが、次にどんなサービスが始まろうとも、またIP放送などの新技術に迫られても大丈夫なように10Gbpsのサービスを東京オリンピックの2020年までにすべての家庭に届けられるようSTNetと計画中です。神山町が大容量高速伝送の光インフラで『新しい田舎』像を創っていますが、地域創生の次なるアイデアが、この光インフラから生まれてくるのか、ワクワクしています」と言葉を強める。

テレビトクシマは光化したインフラで、徳島県知事の飯泉嘉門氏が提唱する「新世紀とくしまCATV網」構想の中核となっている。実に密度濃い25年を刻んできたのである。